

シンポジウム「学びと育ちを保障する学校・教師」

日時：2009年7月5日（日）13:00～17:40

場所：東京大学福武ホール・ラーニングシアター

主催：東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化センター

## セッションⅡ

「子どもの育ちを支える教師とカリキュラム」

### **市民性教育の視点から**

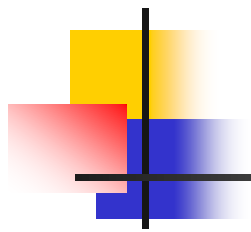
小玉重夫（教育思想・教育人間学）



# 本日の構成

---

- 1 いま、なぜシティズンシップ(市民性)教育か
- 2 ソーシャル・キャピタル(あるいは、ナナメの関係)の視点から
- 3 政治的リテラシーの視点から



# 1

## いま、なぜシティズンシップ(市民性)教育か



# シティズンシップ（市民性）とは何か

- シティズンシップとは、ある一つの政治体制を構成する構成員（メンバー）、あるいは構成員であること（メンバーシップ）を指す概念である。日本語では公民性（公民的資質）、市民性（市民的資質）などと訳されることが多い。今、なぜシティズンシップが注目されているのか。その理由は、シティズンシップが、「国民」という概念よりも新しい社会の構成員を指す概念としてより適切なのではないか、という問題関心が広がってきているからである。



## シティズンシップ(市民性)教育の背景

- 貧困層(ワーキングプア)の増加や格差問題の顕在化など、福祉国家の社会権保障機能が十分に果たされない状況が顕在化
  - ソーシャル・キャピタル、斜めの関係(2)
- グローバリゼーションや多文化的状況の進展に伴い、国民国家の枠組みが変容し、同質的な国民というアイデンティティにもとづく市民概念がとらえ直しを迫られるようになる
  - 公共性の再構築、政治的リテラシー(3)



---

## 2

# ソーシャル・キャピタル(あるいは、 ナナメの関係)の視点から



# 格差是正と公立学校の再生

- 「人生前半の社会保障」(広井良典教育再生懇  
委員)
- 共同体主義者であるロバート・パットナムらは、  
ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)という、  
いわば御近所の底力を創り出す課題と、シティ  
ズンシップとを結びつけることによって、地域社  
会の信頼関係を強化しようという提案を行って  
いる
- →コミュニティスクールの理論的基盤

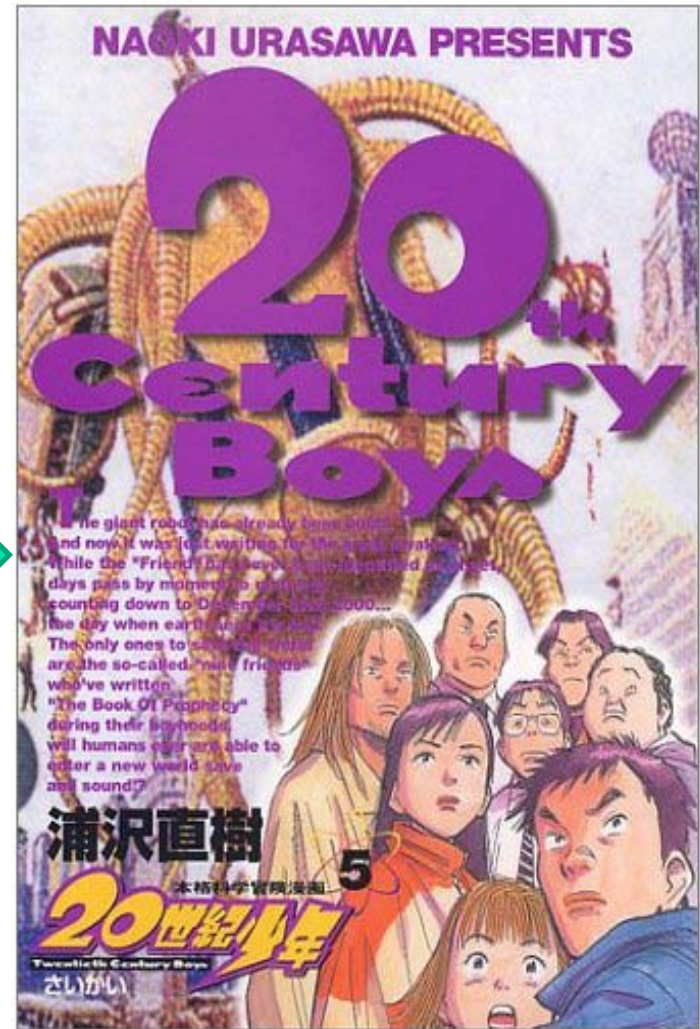
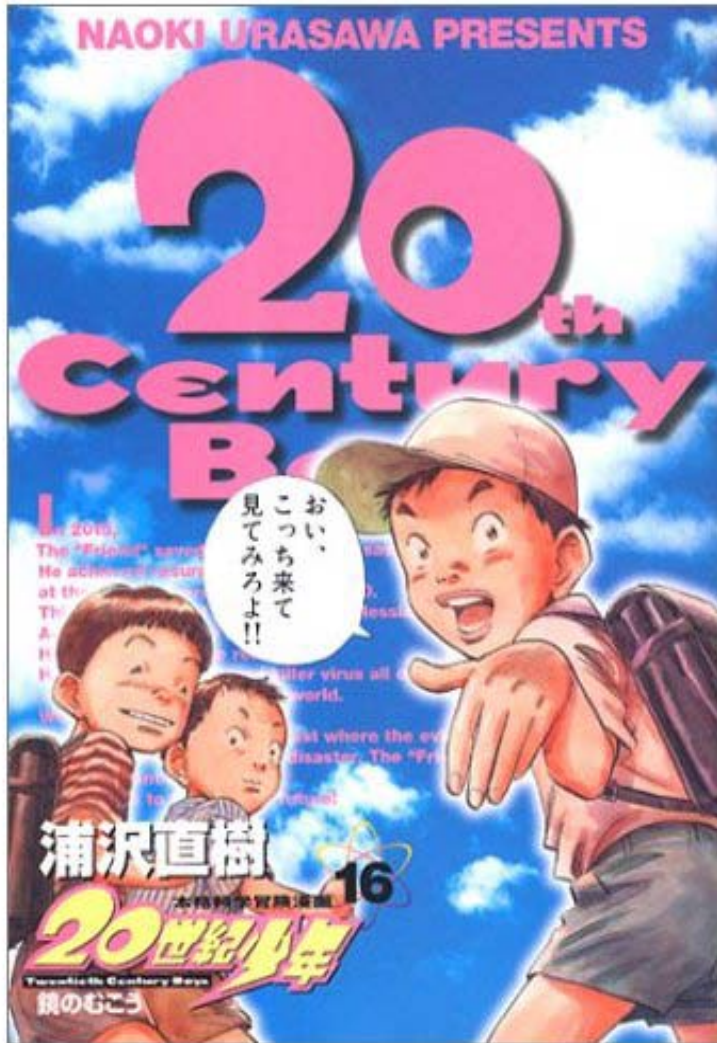
# ソーシャルキャピタルからナナメの関係へ

- 「たとえば伯父と甥、伯母と姪の関係のように、世代は異にするが、親子の関係ではない関係。これを拡張すると、同じ共同体に属する大人との関係もここに入る。」(宮澤 1994)

- 「近代的な意味での作為的な教育主体として子供と向かい合う関係とは本質的に異なる・・・」(鈴木 1996)

- 日本の教育に必要なもう一つの視点は「斜めの関係」ということです。(藤原和博・前和田中校長)





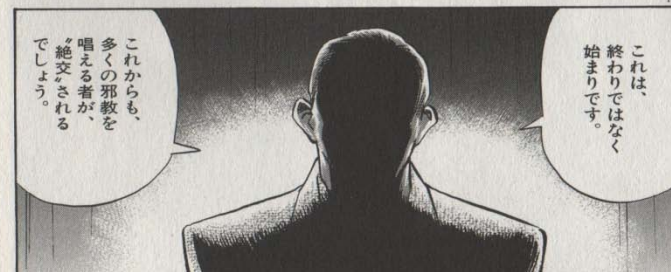
1970年代の友情(からの排除)

21世紀の全体主義社会

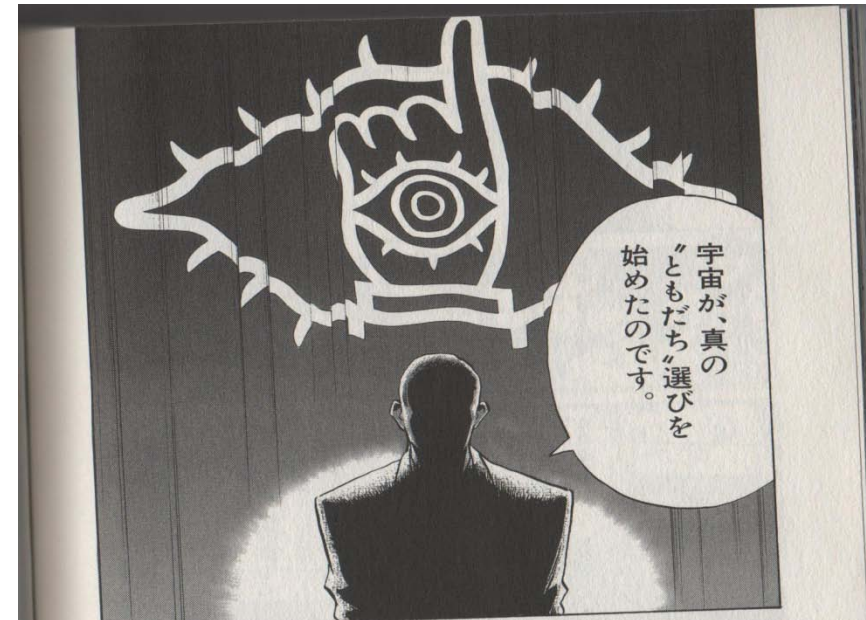


1969-1970年  
子どもたちの世界  
=ヨコの関係が特権化して  
いく世界  
本当の友達だ

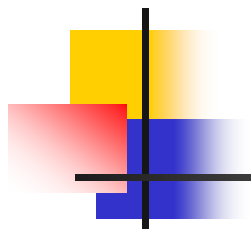




# 真のともだちを選ぶ

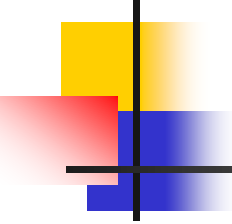


絶交 = 30 関係の肥大化  
2000年



# 3

## 政治的リテラシーの視点から



# 政治的リテラシーのカリキュラム

---

- 1998年、英国でシティズンシップ教育に関する政策文書、通称「クリック・レポート」
- 「クリック・レポート」におけるシティズンシップを構成する三つの要素：「社会的道徳的責任」、「共同体への参加」、そして「政治的リテラシー」
- お茶の水女子大附属小で2008年度から「小学校における『公共性』を育むシティズンシップ教育の内容・方法」の研究開発



# 俯瞰的なペダゴジーからコーディネートのペダゴジーへ

---

- (1) 教師を子どもたちに対して俯瞰的(超越的)な立場におく。
- → 教師と子どもとの間のコミュニケーションを中心とする。
- (2) 子ども同士の間でのコミュニケーション(討論)をまず重視
- → それをコーディネートする立場に教師をおく。



# 知識の批評化

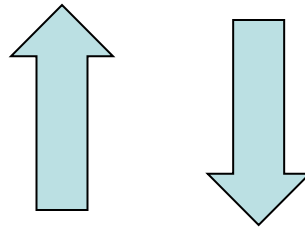
---

- 知識を、到達すべき目標ではなく、市民的な批評の対象として位置づける
- たとえばお茶大附小「市民」では、教科書、地図帳に載っている地名や地形を、覚える目標としてではなく、論争（対立や葛藤）の文脈に位置づける（「沖縄に会社をつくろう」など）。
- 近年のPISAや活用主義とも共鳴する視点である。（政治的）リテラシー

アカデミズム＝専門家集団

学校教師

学習



教育

子ども

社会的(政治的)対立・葛藤



アカデミズム  
(専門家集団)

子ども

市民的批評空間

学校教師  
=コーディネーター

社会的(政治的)対立・葛藤



# リテラシー概念の深化

---

- 社会的・政治的な立場の違いによる提案の対立、葛藤、複数性(アレント)のなかに、自分自身を位置づけ、そのなかでの意思決定や判断を学んでいく。=政治的リテラシー(B.クリック)の基礎を養成。(cf.教育再生懇談会)
- シティズンシップ教育を単なる規範教育にしない。そのためにも、社会的な利害や立場性を有する主体と、判断し意思決定する市民とを区別し、両者の関係を課題とすることが重要。



# 異質性の中身を重層的にとらえる

---

- ひとことで「異質性を排除しない」といっても、そこには複数の次元が存在する。
- 論争や批判が、他者の排除につながる、あるいは、寛容に気を遣うあまり論争が生まれえない、など。
- 寛容・共感次元での異質性(ロールズ)と、論争・批判次元での異質性(ムフ)をいかに両立させるか。「空気を読む」タイプの論といかに差異化するか。



# 文献

---

- 宮澤康人「大人と子供の関係史の展望」『大人と子供の関係史第一論集』大人と子供の関係史研究会1994
- 鈴木聡「『ナナメの関係』をめぐって」『大人と子供の関係史第二論集』大人と子供の関係史研究会1996
- 木村元・小玉重夫・船橋一男『教育学をつかむ』有斐閣2009